

公用文は日本人にも難しい

岩田一成（聖心女子大学）

1、難しい公用文のパターン

公用文の難解さは語彙や文法レベルの問題ではなく談話レベルの問題であり、そこには類型化できるパターンが存在することを岩田（2016）が指摘している。ここでは代表的な3例を紹介したい。

①長い文章

1. 熱中症の発生は、日本では日差しが強く気温も高い7月、8月に多いです。日差しが強く気温も高いときの戸外での活動には、特に注意が必要です。1日の内では、午後2時から5時の間の発生が多いです。この時間帯には、気温も高く、それまでの炎天下の活動で脱水が進み疲労も蓄積しているためと思われます。日差しが強く気温も高いときは、戸外での活動はできるだけ控えましょう。戸外での活動は、日差しが弱く気温も低くなる朝・夕にしましょう。たとえば、一日の中でもっとも気温が低い午前4時から午前7時までに限りましょう。戸外では、帽子や日傘・パラソル等を使い影の中にできるだけ留まることで直射日光を浴びないようにしましょう。戸外で炎天下で活動するときには、直射日光を受けない涼しい場所を準備して、ときどきそこで休憩するようにしましょう。直射日光を避けることは、紫外線の浴びすぎによる健康への悪影響の予防のためにも役立ちます。当・Y市衛生研究所ホームページ「紫外線と皮膚・眼について」もご参照ください。（Y市『熱中症（熱射病、日射病）を予防しましょう』より）

この例は箇条書きの1であることに注意してほしい。これが7番目まで続くことになる。どれだけ長文なのか想像できるであろう。そもそも箇条書きは1行程度に収まっていないと意味がない。こういった長い文章は読むために大きな労力を要する。

②間接的な説明

制度のしくみ

世界有数の医療水準を達成した国民皆保険制度をこれからも持続可能とするために、医療制度改革が行われてきました。その中で、後期高齢者医療制度は、国民全体で高齢者の医療を支えるものとして、これまでの老人保健制度から移行し、平成20年4月にスタートしました。

新しい制度は『高齢者の医療の確保に関する法律』に基づき、各都道府県に設置された広域連合により運営され、被保険者は各地域の医療費に見合った保険料を負担するこ

となりました。高齢者の医療費は、医療機関等の窓口での自己負担分を除き、保険料が1割、公費（国県市の税金）が5割、現役世代の加入する他の医療保険が4割を負担しています。

今後さらに高齢化が進みますが、みんなで支え合いこれまで通り安心して医療を受けることができ、健康あふれる長寿社会をめざすものです。

（H市『後期高齢者医療制度』より）

国民皆保険制度が世界有数の医療水準にある。この制度は国民全体で支えるものである。さらに各都道府県の広域連合なるものが運営をする。これらが長寿社会のためである。こういう流れで説明が続いている。これらの説明は話がとても大きくて世界とか国民とか社会とかを連発しているが、肝心の個人に向かって何をしてほしいのかが書かれていない。個人レベルに合わせて簡単に言うと、「後期高齢者は保険料負担が上がります」という一言に尽きる。その理由として、「もはやお年寄りの医療コストを社会で支えることができなくなってしまったからです。」という一文があってもいいかもしれない。とにかく大事なことははっきり言わない点で、この文章は非常に間接的であると言える。こういった文章は非常に回りくどく、伝達内容がぼやけている。

③法律文の借用

入居者が60歳以上の方又は昭和31年4月1日以前に生まれた方であり、かつ、同居し又は同居しようとする親族のいずれもが60歳以上の方若しくは昭和31年4月1日以前に生まれた方又は18歳未満の方である世帯。

（H市『県営住宅入居者募集』の一部より）

これは非常に硬い文章である。「入居者が60歳以上の方又は昭和31年4月1日以前に生まれた方」というところがいくつもの解釈を生じてしまう。この文章が出された年の計算で考えると「53歳以上の人」という意味なのだが、なかなかそういう解釈はできない。これは法律文のコピー＆ペーストを繰り返しているうちにこうなったようである。法律文をコピーすると当然文章は硬くなる。

ここまで、難解な文章の3つのパターン（①長い文章、②間接的な説明、③法律文の借用）を見てきた。こういった例を見ていると、「やさしい日本語」はもはや外国人だけの問題ではないことがよくわかる。伝達すべき情報が、なんらかの事情でうまく伝わらなくなっていることは明らかである。

2、日本人というくくり方の問題

公用文は日本人が見ても難しいということをここまで見てきた。この節ではもう少し掘り下げて、日本人という概念について考えたい。本発表はタイトルに「日本人」という言葉を使っているが、日本国籍を持つ人と言ってもさまざまな方が含まれている。

例えばろうの方々は、母語が手話なので日本語が第二言語になる。つまり日本国籍を持って

いても理屈上は外国人と同じ言語環境にある。ろう児への日本語指導は日本語教育（外国人向け）の知見が役に立つことはすでに指摘されている（岡 2013）。知的障害者向けの日本語は、外国人向けの「やさしい日本語」と共通点が多いこともすでに論文が出されている（打浪ほか 2017 など）。『ステージ』という知的障害者が当事者となって発行されていた新聞を分析することで、いろいろなことがわかってきている。また、自治体において「やさしい日本語」の研修を行うと、とても参加率が高いのは健康福祉関係の窓口の職員さんである。いわゆる高齢者に対して文章が伝わっていないことの裏返しであろう。若者であっても難解なものがたくさんあることは、本発表の 1 節を見ていただければわかる。さらに、学校現場のデータを見れば、日本語が母語ではなく、かつ日本語ができなくて困っている児童生徒（日本国籍は持っている）がいよいよ 1 万人に迫るところまできている（文部科学省 2017）。もはや日本人と外国人の境界線を論じることが難しくなっているのではないだろうか。

3、難解な公用文で何が悪いの？

難解な文章に関連するニュースをここでいくつか紹介したい（岩田 2016 より引用）。まずは高齢者が困っているという記事である。「後期高齢者医療制度：お年寄り悲鳴 難解書類、どっさり」（毎日朝刊 2008.08.15）では、医療制度の変更に関するお知らせが非常に難解で、受け取った人が困っていると指摘している。値上げが関わるお知らせは、書き手に心理的圧力がかかることもあり、内容がわかりにくくなる傾向がある。ただ、内容が伝わらないなら、お知らせを出す意味がないので難しいところである（お知らせをしたという既成事実だけを狙っている確信犯なら本当に積みは重いと思う）。

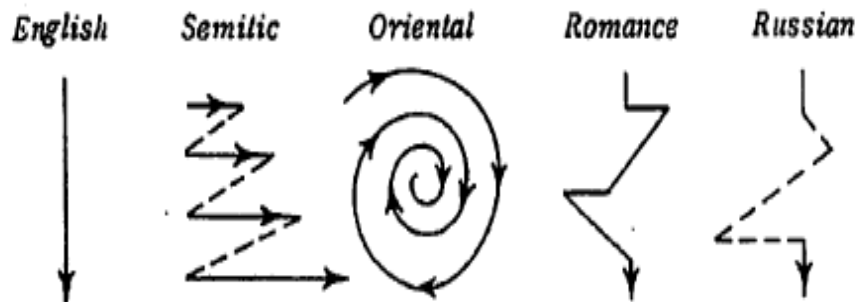
次は翻訳に関わる外国人スタッフの嘆きである。「人と人結ぶ架け橋 外国人の生活支援」（朝日朝刊 2008 年 01 月 05 日）という記事では、日本語文を理解するのが大変で、翻訳する前に労力がいるという指摘である。現在、自治体が発行するお知らせを外国人スタッフが翻訳して配信しているところがある。英語や中国語といったメジャー言語に限られるが、取り組み自体は評価されるべきことであろう。この翻訳に関わるスタッフが大変だということである。同じ話は実際にいろんな方から聞くが、もともとの日本語やさしく書かれていたら、こういったスタッフの仕事はずいぶん楽になるであろう。

最後は、国際的な書類を難解に書くと相手に理解されないという問題を紹介したい。「「浄土思想」現状とズレ 平泉の「登録延期」勧告、西村・東大教授に聞く」（朝日朝刊 2008 年 05 月 31 日）という記事では、平泉の国際記念物遺跡会議への登録が延期されたことを紹介している。その原因が、申請文書にあるというのである。西村教授のコメントでは、論理関係が見た目で実感できないとのこと。国内のみで通用するぐだぐだの文章は、国際的な場面で役に立たないといういい例である。

4、回りくどい言い回しを好んでいませんか？

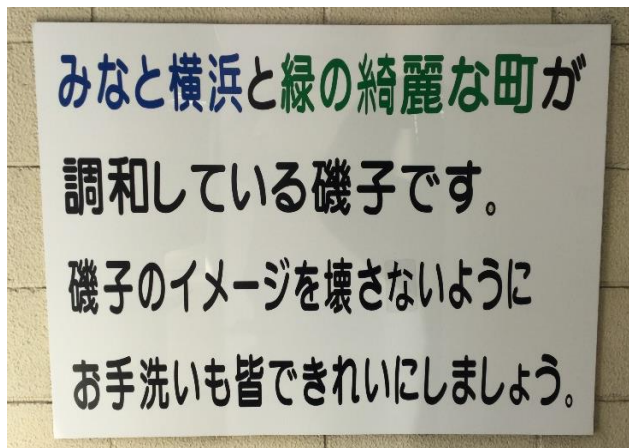
認知心理学や作文技術の書籍でよく紹介されているのが Kaplan (1966) のモデルである。

日本人の作文は渦巻モデルとして紹介されている（カプラン自体は日本人を **oriental** には含めないと述べているのだが、そうすると日本人はどこに入るのかという問題が出てくる）。このモデルでは、アジア人の作文はストレートではないということになる。

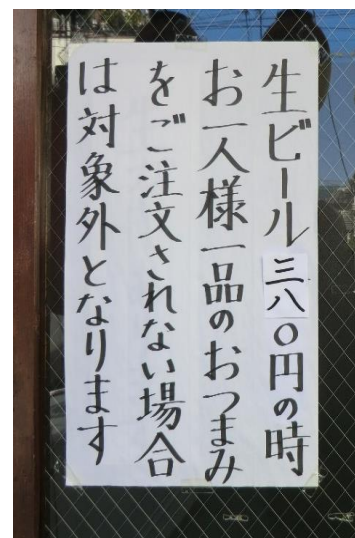


文化と作文のパターン Kaplan (1966)

カプランのモデル自体は、多くの批判が出ているが、いまだに多くの概説書に出てくるのはそれなりに説得力があるからであろう。以下のような貼り紙を見ていると、このモデルがある程度当たっているのではないかと考えてしまう。要は、メッセージの核心部分をストレートには言わないサインが目につくのである。



トイレ前のサイン（横浜市）



居酒屋のサイン（川崎市）

横浜市のサインについては、掲示場所がトイレの前であり、メッセージの核心は「お手洗いをきれいに使いましょう」という一言である。ところが、「みなと横浜と緑のきれいな町が調和している」などという入り方をすると、核心のメッセージがぼやけてしまう。川崎市のサインも、メッセージの核心に触れないという意味で同じタイプであろう。「生ビールが 380

円のときは、必ず食べ物を注文してください」というのが核心であり、どうもストレートな物言いを避けている様子が見えてくる。

本田ほか（2017）では動物園の檻やタバコの注意書きを比較しながら、日本語の表現がオーストラリアやイギリスと比べて間接的であることを指摘している。これは我々の心の中にある無意識の好みのようなものを表しているのではないだろうか。つまり、ストレートな物言いよりも間接的な言い方の方が落ち着くのである。



長岡市の動物園



シドニーの動物園

シドニーの動物園のように「これらの動物はかみます」という言い方は大変ストレートであるが、長岡市の方は「ことがあります」で断定を避けたり、「エサのまちがえて」のように理由が入ったりするため長くなってしまう。下のタバコの注意喚起にしても、イギリスのタバコはストレートに「喫煙は死をもたらす」となっているが、日本のタバコは非常に長い説明がついている。



日本のタバコ



イギリスのタバコ

5、「品がない」考

ここで論文を紹介したい。宇佐美（2013）では、難解文書を書きかえてもらう実験を行い、書き手の心の中で何を考えているのか明らかにしようとしている。そこでは、言語形式を簡略化しようとする気持ちと文書の品位保障をしたい気持ちがぶつかって書き手はジレンマを抱えていることが明らかになっている。つまり、わかりやすさに特化すると品がなくなると心配する人がいるのである。筆者が自治体の職員研修を行うときも、そういう意見を言ってくるひとがたまにおられるので、この気持ちは大変よくわかる。そこで、文章の品位について少し考えたい。

客観的に考えるために、英語の例をあげる。またわかりやすさのために語彙の話で説明する。イギリス英語では、鏡を‘mirror’、トイレトペーパーを‘toilet-paper’と呼ぶことは非上流階級の言い方だとされている。そこで上品な言い方をしようと思うと、鏡は‘lookingglass’、トイレトペーパーは‘lavatory-paper’となる。我々英語のノンネイティブからすれば‘mirror’、‘toilet-paper’といってくれたほうがわかりやすいことは明白である。ところが、あるイギリス紳士は、品のある英語に固執して後者の言い回しにこだわっているとしたら、どう思うだろうか。相手への配慮より品位を優先するというのはまさにこういう状況であると言える。やさしい日本語の普及を阻む最大の壁は、我々の心の中にある品位ではないだろうか。品位を保ちたいという気持ちは大変重要であるが、それをがまんしてでも相手に伝えたい気持ちが優先されると真の「やさしい日本語」になるのであろう。

参考文献

- 岩田一成（2016）『読み手に伝わる公用文：〈やさしい日本語〉の視点から』大修館書店
- 宇佐美洋（2013）「「やさしい日本語」を書く際の配慮・工夫の多様なあり方」庵功雄・イヨンスク・森篤嗣編『「やさしい日本語」は何を目指すか：多文化共生社会を実現するために』ココ出版 pp.219-236
- 打浪文子・岩田一成・熊野正・後藤功雄・田中英輝・大塚裕子（2017）「知的障害者向け「わかりやすい」情報提供と 外国人向け「やさしい日本語」の相違 —「ステージ」と「NEWSWEB EASY」の語彙に着目した比較分析から—」『社会言語科学』20巻1号 社会言語科学会 pp.29-41
- 岡典栄（2013）「ろう児への日本語教育と「やさしい日本語」」庵功雄・イヨンスク・森篤嗣編『「やさしい日本語」は何を目指すか：多文化共生社会を実現するために』ココ出版 pp.299-319
- 本田弘之・岩田一成・倉林秀男（2017）『街の公共サインを点検する』大修館書店
- 文部科学省（2017）『日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査（平成28年度）』http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/06/1386753.htm（2018年1月閲覧）
- Kaplan, B.R. (1966) Cultural Thought Patterns in Inter-Cultural Education. *Language Learning* 16, 1-20.